

BACH



VIOLIN
SHUNGO MISE



CELLO
SEIKO TAKEMOTO



SHAMISEN
HIDEJIRO HONJOH



COMPOSER
YU KUWABARA



HAUTA

淡座
AWAIZA



淡座

江戸にまなび、
音と言葉のあわいをえがく

淡座は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイティブなグループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでもとりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものの在り方を模索し、作品や演奏として発信しています。

今後の公演・出演

●志ん輔餅の会

2024年5月6日(月) 14:00開演
於 紀尾井小ホール (東京都千代田区紀尾井町 6-5 5F)
志ん輔師匠と、古典落語の大作《猫定》に挑戦します。

●川開き 二〇二四

2024年6月1日(土)
於 深川富士見 (東京都江東区古石場 2-18-5)
屋形舟を貸し切り、三味線、ヴァイオリン、チェロで「流し」で江戸の名所をめぐる、粋な船遊び。
本年は、航路を両国方面にする予定です。

お問い合わせ ▶ メール info@awaiza.com ・ お電話 080-4091-6491

第七回本公演 バッハと端唄II

2024年4月13日(土) 15:30開場 16:00開演

ところ 安養院瑠璃光堂

淡座メンバー 三瀬俊吾(ヴァイオリン)

竹本聖子(チェロ)

本條秀慈郎(唄・三味線・胡弓)

桑原ゆう(作曲・編曲)

宣伝美術/桑原ゆう

主催/一般社団法人淡座

共催/安養院

awaiza.com

ヨーロッパと江戸。
同時代に生まれた音楽のあわいをさぐる試み—

バッハと端唄II

淡座第七回本公演

曲目

- 一、J.S. バッハ/カプリッチョ
「最愛の兄の旅立ちに寄せて」 **編曲初演**
(桑原ゆう編曲)
ヴァイオリン・チェロ・三味線
子ノ曲
丑ノ曲
寅ノ曲
卯ノ曲
辰ノ曲 **新作初演**
ヴァイオリン・チェロ・三味線弾き唄い
ヴァイオリン独奏
- 一、桑原ゆう/十二支音考

- 仲入り —
- 一、J.S. バッハ/G線上のアリア **編曲初演**
(桑原ゆう編曲)
ヴァイオリン・チェロ・三味線
- 一、端唄「夜桜」「三下りさわぎ」「淡雪」
(桑原ゆう編曲) **いずれも編曲初演**
三味線弾き唄い・ヴァイオリン・チェロ
- 一、桑原ゆう/夢の浮橋I —「吉原木遣り」より
三味線弾き唄い・胡弓・ヴァイオリン・チェロ
- 一、J.S. バッハ/「ゴルトベルク変奏曲」より
(桑原ゆう編曲)
ヴァイオリン・チェロ・三味線



曲目解説

かたやヨーロッパ、かたや江戸。

バッハは1685年に生まれ、1750年に亡くなりました。暴れん坊將軍といわれる徳川吉宗は1684年に生まれ、1751年に亡くなったので、ふたりは生死をほとんど同じくしています。端唄、バッハの音楽、桑原作品。「うた」と「ことば」をテーマに、同時代に生まれた東西の音楽のあわいをさぐる。

一、J.S. バッハ／カプリッチョ「最愛の兄の旅立ちに寄せて」

(桑原ゆう編曲)

1703年もしくは1704年に作曲された、十代の若いバッハの作品。バッハの兄ヤーコプが、スウェーデン国王カール12世の軍隊のオーボエ奏者として、ポーランドへ赴く際に作曲されたといわれている。タイトルのカプリッチョは「さまぐれ」を意味する。全6楽章で構成され、各楽章に標題的な題名が付いている。

・第1楽章 アリオーン、旅を思いとどまらせようとする友人たちのやさしい言葉アリオーンとは小さなアリアを意味する。休符から始まるため、拍節感が分かりにくい。1拍目にある下行形の旋律で、旅を思いとどまらせる言葉を連想させられる。

・第2楽章 他国で起こりうるさまざまなできごとの象徴

フーガ風であるが、テーマは毎回6度音程の下行から始まり(最後のみ5度音程)、不幸な想像という題名から、うなだれている表現にも感じられる。

・第3楽章 友人一同の嘆き

ひとつの和声進行が繰り返されるパッサカリヤ形式。下行形の半音階が一同の嘆きを表現する。

・第4楽章 やむをえず友人たちは集まり、別れを告げる

5つ、または4つの音による下行形の音階をテーマに、別れが描写される。

・第5楽章 郵便馬車の御者のアリア

御者のラッパの音と思われる、下行形のオクターブのテーマが印象的なアリア。この楽章のみ、前半と後半に繰り返しがあがる。

・第6楽章 御者のラッパを模倣したフーガ

前楽章のテーマが織り交ぜられたお手本のようなフーガ。複雑に展開され、華やかに締めくくられる。

(三瀬俊吾)

一、桑原ゆう／「十二支音考」子・丑・寅・卯・辰の曲

事始め二〇二〇からはじめた、十二支をひとつずつ音楽にしていく試み。本年の十二支である《辰の曲》が新作初演となる。

・子の曲

三味線の効果音的奏法「アテハジキ」を、ねずみの鳴き声に見立てた作品。

・丑の曲

萬葉集にわずか三首しか見当たらない、牛を詠んだ歌のひとつを朗々と唄う。

・寅の曲

虎の多面的キャラクター性を表現するため、お座敷遊び「トラトラ」で唄われる端唄「和藤内」の手と、別の機会に作曲した《インドの虎狩り》(ヘセロ弾きのゴージュ)より)のフレーズを重ねて演奏する趣向。

・卯の曲

良寛の長歌「月の兎」の一節を用いた作品。

・辰の曲

雨乞い踊から材をとった作品。龍は鱗介類のかしらとされ、普段は水中にひそみ、水と密接な関係を持ち、降雨をもたらすと考えられていた。

(桑原ゆう)

一、桑原ゆう／「十二支音考」子・丑・寅・卯・辰の曲

- 1. プレリユード
- 2. アルマンド
- 3. クーラント
- 4. サラバンド
- 5. フーガ
- 6. ルール
- 7. ガヴオット
- 8. メヌエット
- 9. ブルー
- 10. ジーグ
- 11. シャコンヌ

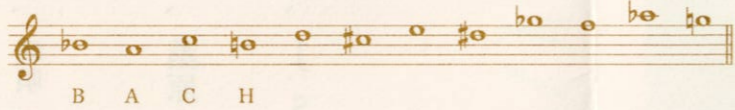
バッハの名前(BACH)をドイツ音名にすると「シブ・ラド・シロ」という音の連なりが得られる。バッハ自身をはじめ、古今さまざまな作曲家が作品に用いてきたあまりにも有名なこの音の連なりから、12音の音列をつくり、11の小品から成る小ソナタを構想した。普段の作曲において、私はあまり音高を重視しない(音高は、音の状態のひとつの側面に過ぎず、どちらかというところ、触感やテクスチャーを重要視している。)のだが、本曲で、「ソナタ」を作曲することは、音高の扱いについて如何に考えるかだと見なした。そのため、音高の使用について、ある種の制限をもうけることにした。

第1曲プレリユードは、下記音列の最初の2音、つまり「シブ・ラ」のみで作成。第2曲アルマンドは、音列左から3音「シブ・ラ・ド」のみを使用。第3曲クーラントは、音列左から4音「シブ・ラ・ド・シロ」、第4曲サラバンドは、音列左から5音「シブ・ラ・ド・シロ・レ」というように、各曲を限られた音高のみを用いて作曲することにした。曲を追うごとに使える音高が増えていき、11曲目にあたる終曲のシャコンヌで、やっと12音全てが使えるようになる。

あらかじめ、各曲を1ページの楽譜でおさまる範囲で作曲すると決めておいた。(シャコンヌのみ、1ページ半ある。)各楽想は、バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ全3曲、およびソナタ全3曲、無伴奏チェロのための組曲全6曲に採用された様式を、ほぼ網羅するようにえらび、バロック組曲にならった順番で配置した。2021年に行なった「バッハの場」で、半年かけて演奏した無伴奏全12曲を、走馬灯のように振り返るねらいである。

11の小品は、バロック組曲の楽想にのっとりながらも、ヴァイオリンで可能なあらゆる奏法を駆使して展開する。バッハと、バッハに影響を受けた多くの偉大な作曲家たちに連なりたい想いを込めた、小ソナタである。

(桑原ゆう)



一、J.S. バッハ／G線上のアリア(桑原ゆう編曲)

バッハの音楽で、一般的によく知られた楽曲のひとつ。「G線上のアリア」というのは通称で、原曲は「管弦楽組曲第3番ニ長調」の第2曲「エール」である。ドイツのヴァイオリニスト、アウグスト・ウィルヘルムがピアノ伴奏付きのヴァイオリン独奏曲として編曲した際に、ニ長調からハ長調への移調を行ったため、ヴァイオリンの4本ある弦のうち最低音の弦、G線のみで演奏できることに由来して「G線上のアリア」と呼ばれるようになった。

淡座は「主よ、人の望みの喜びよ」をたびたび演奏しているので、それなら、「G線上のアリア」も演奏しないと片手落ちではないかということで、今回レパートリーに加えることとなった。

(桑原ゆう)

一、端唄「夜桜」「三下りさわぎ」「淡雪」(桑原ゆう編曲)

春の端唄セレクション。

一、桑原ゆう／夢の浮橋Iー「吉原木遣り」より

《夢の浮橋》は、端唄を「編曲する」というより、より創作的に「リコンポーズする」シリーズと位置付けている。端唄の島とアンサンブルの島とがそれぞれ独立して存在し、その間に橋をかけるように、つまり、ふたつの材料を調理して一品つくるというよりは、素材の特徴はそのままに残し、並べ方や組み合わせ方で新しく見せるようなつくり方を試みている。

《夢の浮橋I》で引用した「吉原木遣り」は、江戸時代の吉原で女だけが唄った木遣り唄で、いまはもう廃れてしまったのだそう。芸を極め、お客さまを喜ばせるためならば、取り入れられるものは何でも取り入れる、そういう貪欲さと、日本の女性に元来そなわるしなやかさや強かさを感ずる旋律である。

(桑原ゆう)

一、J.S. バッハ／「ゴルトベルク変奏曲」より(桑原ゆう編曲)

「2段鍵盤付きクラヴィチェンバロのためのアリア」とさまざまな変奏」と書かれ、1741年に出版された作品。元ロシア大使のカイザーリンク伯爵は、病気がちで不眠に悩み、その苦しみを和らげるため、召使いのゴルトベルクが寝室の隣室で音楽を奏でる必要があった。そこで、バッハが依頼を受け作曲したのがこの「ゴルトベルク変奏曲」といわれる。主題のアリアのあと、30の変奏(ヴァリエーション)を経、再びアリアに戻り終結する長大な作品である。

30の変奏のうち、3の倍数にあたる変奏はすべてカノンである。第3変奏は同じ音のカノンで始まる。第6変奏では、主題を追いかけるカノンは2度上の音になり、順々に音の差は広がる。この作曲法は非常に論理的で、変奏曲のバスの進行を取り入れると制約が多く、作曲は困難を極めるはずである。しかし、パズルを組み立てるような無機質な音楽になっていないどころか、そのような法則を忘れさせるほど、純粋な音楽として成立していることに驚愕させられる。3の倍数以外の変奏もバラエティーに富み、様々なコントラストや緻密な構成により、30の変奏が理路整然と並ぶ。

「3」という数字は、変奏の数だけでなく、「ゴルトベルク変奏曲」全体において、重要な数字のような。主調はト長調だが、ト短調の変奏が3つ、主題のアリアは3拍子。他にも、バッハの作品集の多くは3の倍数で構成されている。

・アリア

これから続く30の変奏の主題。バスの動きが変奏曲全体を支配する。32小節のこのアリアは、16小節ずつの前半後半、すべて4小節ずつのフレーズで、完璧なシンメトリーを構築している。アリアを含め、すべての変奏は前半と後半にそれぞれ繰り返し記号が付いている。

・第7変奏

「Al tempo di Giga」(ジーガのようなテンポで)と書かれた、シシリアーノ風の舞曲。

・第11変奏

ゴルトベルク変奏曲全体の3分の1が終わり、仕切り直すように始まる2段鍵盤のための変奏。

・第12変奏

4度(下)の反行(鏡像)カノン。ヴァイオリンがG(ソ)↓F#(ファ)↓G(ソ)と先行すれば、チェロはD(レ)↓E♭(ミ♭)↓D(レ)と鏡のような動きをする。

・第13変奏

32分音符の細かい動きの息の長い旋律と、2声のポリフォニックな動きによる、3声の変奏。前半後半ともに、終わる直前の和声が印象的に響く。

・第25変奏

ト短調でAdagio(アダージョ)の標記。荘厳な雰囲気の中、バスの半音階進行が第21変奏を想起させる。

・アリア・ダ・カーボ

ダ・カーボとは、曲冒頭に戻るという意味。30の変奏を経て、アリアへと帰る。ゴルトベルクの旅の始まりを思い返しなが、桑原編曲の妙を堪能していただきたい。

(三瀬俊吾)

2022年、安養院の御住職、平井和成先生のご提案により、黒田鈴尊さんをまじえた尺八、三味線、ヴァイオリン、チェロのカルテット編成で、「ゴルトベルク変奏曲」全曲を初演した。編曲の際、バッハの意図を汲みつつ30の変奏に彩りの緩急をつけるため、全てをカルテットにせず、デュオやトリオによる変奏も入れ込んだ。本日は、三人で演奏可能な変奏のみを抜粋して披露する。

(桑原ゆう)

出演者のプロフィール等は、ウェブサイトをご覧ください。